

海を渡った家族にとって「ことばの 継承」とは —日系アメリカ人の父親の語りから—

佐藤 一央

要 旨

移民の言語は3代を待たずして消えるという言説がある。3代を待たずして日本語が消えていく家族がいる一方で、3代で消えていない家族がいるとすればその親はどのような言語観・教育観を持ち、家族はどのような行動を取っているのか。そして、その家族にとって日本語の継承はどのような意味を持っているのか。これらの点を日系アメリカ人の二人の父親を通して明らかにし、日本語教育関係者の役割を考察することを試みた。二つの家族に共通しているのはアメリカという英語が求められる社会にあって、自身のルーツに誇りを持ち、長年に渡り子どもたちに様々な形で日本や日本語に触れさせてきたことであった。そこには家族への思いと、個人の選択として親のことばを少しでも取り込み社会参加をしようとしている子どもの姿があった。一連の語りから、ことばを継承するとは単に親の母語や言語運用能力の習得だけではないことの示唆が得られた。

キーワード

ことばの継承 継承語学習者 日系人 言語観・教育観 アイデンティティ

1. 研究の背景・問題意識

日本人の海外への集団的移住は、明治元年のハワイ移住に始まったとされる。以来 150 年が経過し移住者及びその子孫である日系人はブラジルの約 190 万人、米国の約 130 万人を筆頭に、南北アメリカ大陸を中心に約 380 万人（2016 年）¹とされている。筆者と継承語としての日本語との出会いは 2000 年にアメリカ・カリフォルニア州に赴任したことから始まる。帯同した筆者の子どもたちは平日は居住地学区の現地校に通い、週末は日本語補習校に行っていた。カリフォルニア州は日系移民の歴史も長いことから、その補習校は現地永住者や国際結婚をした家庭の子女の割合が高く、日本帰国を前提とした駐在員子女とは日本語学習の目的もまた日本語能力の点でも歴然とした差があった。ここで継承語教

育としての日本語に初めて出会った。筆者は日系アメリカ人と一緒に仕事をする機会も多くあったが、日本名を持ちながらも日本語を解さない人が少なくなかったことは当時の筆者にとっては驚きでしかなく、海外における日本語の継承を深く考える契機となった。

北米においては二世以降の世代になると日本語のコミュニケーション能力や読み書き能力が不十分な日系人が多くなると言われている。1999年にカリフォルニア州で開催された全米継承日本語教育会議では「今日、三世世代以降の日系人子弟が日本語学習に積極性を見せるケースは極小である。」とした上で更に「異人種間結婚が常識的な現象となりつつある中、日本語が継承されていく可能性は更に低くなりつつある。」(井川 1999, p. 85) という課題認識が提起されている。3代を待たずして日本語が消えていく家族がいる一方で、3代で消えていない家族がいるとすればその親はどのような言語観・教育観を持ち、家族はどのような行動を取っているのだろうか。そして、そのような家族にとって日本語の継承はどのような意味を持っているのだろうか。本稿では日系アメリカ人の父親の語りを通してこれら二つの点を明らかにした上で、日本語教育関係者の役割を考察することを試みる。

2. 先行研究と本研究の枠組み

2.1 アメリカの継承日本語教育の歴史と現状

先行研究を述べるにあたって、まずアメリカでの継承日本語教育の歴史を以下に概観する。アメリカの最初の日本語学校は1895年ハワイ州マウイに開設された。アメリカ本土では1902年にシアトルにでき、その後西海岸各地へと広がった。戦時中は日系アメリカ人の強制収容で閉鎖され、二世の日本語の喪失が急速に進んだ。戦後になって教育を再開するも、世代が進むにつれ家庭でも日本語を話さない児童・生徒が増え、現在では日本語が外国語となっている児童生徒も多い。一方で日本からビジネスや研究・留学目的で渡来した日本人、或は国際結婚等で永住する日本人などの増加に伴い、その子弟のための日本語補習校は1960年代から90年代まで増え続け、現在では約80校が運営されている。(ダグラス・知念 2014、Yano 2011)

2.2 日本語継承に関する先行研究から見た本研究の意義

ダグラス・知念(2014)はアメリカの継承語教育の歴史と現状を踏まえ、従来「マイノリティである継承語話者は『社会のお荷物』という見方がされてきた。」とした上で、それが『国の資源』とみられるようになったのは1980年以降、特に2001年の同時多発テロ以降のことである(p. 3)と述べ、経済的、政治的理由でその重要性が強く認識されるようになったとしている。こうした状況下、本稿で取り上げるのは日系三世や四世といった世代が進んだ家族の父親から見た日本語の継承の様相である。日系二世、三世を取り上げた論考に佐々木(2003a, b)がある。そこでは継承される側のインタビューを通して日本語習得に至るまでの状況が述べられているが、継承する側である親についての言及はない。また、一方が日本人である国際結婚家庭の日本語継承について親の視点から研究されたものはあるが多くは母親、もしくは母と子の語りからの分析で、且つ世代としては1世が取り上げられている。(稲垣 2015、村中 2010 他)。このように、本稿で対象とする父親とこ

とばの視点から取り上げられた研究は少なく、父親がことばの継承と子どもの将来にどのように関わろうとしているのかはこれまでほとんど明らかにされてこなかった。

2.3 用語の使用

本稿では継承語と継承語学習者を次に示すように捉えて論を進める。継承語「heritage language」には様々な定義があり、中島（2010）は「狭義には親や祖父母から継承した出自と関係のある言語・文化である。」とした上で、その特徴の一つに「家庭言語である」（p. 15）と加えている。本稿では家庭言語であるか否かに関わらず「異言語環境で親や祖父母から世代を越えて子どもに受け継がれていくことば・文化」と定義する。一方、「継承語学習者」とは誰かということにも様々な解釈がある。一般的には Valdés（2001）の「家で英語以外の言語を話す家庭に育ち、その言語を話す、或は理解できるなど、その言語と英語がある程度両方できるバイリンガル学習者」（p. 38）という定義が知られている。しかし、本稿の対象である日系アメリカ人は世代が進み、必ずしも家で日本語を話しているという家族ばかりではない。そのような多言語・複数言語状況に鑑み、「（アメリカの）継承語学習者とは、英語以外の特定の言語と家族或は祖先と繋がりを持ち、その特定の継承言語・文化を学習するかどうかを主体的に決める個人」（Hornberger & Wang, 2008, p. 27）とする定義を援用し分析の軸とする。

3. 研究方法

3.1 調査フィールド及び調査協力者が置かれた社会的文脈

筆者が日本語の継承を考えるきっかけとなった国であるアメリカは、英語を使うことが“求められる”社会である。様々な国・地域にルーツを持つ人が暮らす移民社会であり様々な言語が飛び交う一方で、アメリカの市民権を得るには英語が話せることが条件になっている（1906 年、帰化法）。更には 1980 年代以降のイングリッシュオンリー運動の台頭などでいわば多言語環境下の“モノリンガル社会”という側面も併せ持つ。今回の調査協力者 2 名はどちらも筆者がアメリカ在住時にビジネスで関係のあった日系アメリカ人である。

3.2 調査内容及び分析方法

本稿では「ことばを継承するとはどういうことか」という観点から次の 5 つの項目、①ファミリーヒストリー、②家庭内での言語使用の状況、③日本語の継承についての考え方、④家族にとっての日本語の価値、⑤アイデンティティとことばとの関連、について半構造化インタビューを行い、それらの語りの持つ意味について考察を行った。インタビューは 2017 年 9 月、カリフォルニア州にある調査協力者のオフィスで英語により約 1 時間実施した。インタビューは 1 対 1 で行われ、調査協力者の了承のもと録音し筆者が日本語訳として文字化した（A4、15 枚）。尚、文中の名前は仮名である。

4. 事例（1）ジェフ・シゲル・ハラグチのケース

4.1 ファミリーヒストリー

「I am a fourth generation Japanese American whose great grand parents immigrated to Hawaii in the early 1900's so the Japanese language has been lost along the way.」

ハラグチさんの両親は日系3世である。父親の仕事の関係で7歳まで東京で過ごした。一旦ハワイに戻るが15歳の時に再度来日し3年間を過ごす。通算在日年数は10年。大学入学を期にカリフォルニア州に移動。家族はフィリピン系2世の妻と4人の子ども（長男・大学生、長女・高校生、次男・高校生、次女・中学生）がいる日系4世である。尚、文中の（ ）は筆者の補足である。

4.2 家庭内での言語使用状況—日本語との出会い—

日本でのハラグチさん家族は英語で話をしていたという。家では日本人のお手伝いさんがいて日本語を教えてくれた。「その頃はたくさん日本語を話していたと聞いたね。」と言う。大学生になってからは父親がまだ日本で勤務していたこともあって長期の休みには毎年日本に来ていたという。その間、「日本の会社でアルバイトをしていたこともある」。そのおかげで「敬語と発音には自信があるよ。日本語を聞くのはだいたい分かる。話すのは少し。」という。現在、家庭内は全て英語である。ハラグチさんは筆者との会話の中では断片的に日本語の語彙が入る時があるが、まとまった文として日本語を話すことはない。

4.3 日本語の継承についての考え

4.3.1 ハラグチさんの両親の思い

ハラグチさんの両親は彼にアメリカンネームとともに「シゲル」という名前を付けた。当時、日系人だからといって必ず日本名を持っていたというわけではないという。「父親は日本語はできなかった。あの時代、戦時中の収容所キャンプ²のこともあり日系アメリカ人は子どもに日本語を話してほしくないと思っていた親が多かったんだ。」と話す。だが、母親は「私と姉（姉も日本名を持つ）に日本語を学んでほしいと思っていたんだ。」という。彼が日本語を学び始めたのは再度来日した高校時代（アメリカンスクール）である。「書くのは高校の頃は今よりはできたと思う。今はダメだね。」と笑う。

4.3.2 子どもたちへの日本語継承への思い

彼には4人の子どもがいる。学区内の高校には外国語としての日本語クラスがある。大学生の長男はこの高校で日本語を履修した。高校生の長女は現在履修中である。しかし次男は日本語ではなくスペイン語を取ったという。子どもたちの日本語学習の様子を尋ねると「長男にはもう少し日本語の勉強をしてほしかったけどね。でも私たちはもう十分ミックスされているから。Half Japanese, Half Phillipino. 4人の中で少なくとも一人、日本語に興味のある子がいる。それでハッピーだよ。」という（Yukaのこと。後述）。

この世代の日系アメリカ人にとっては戦争中の日系人収容キャンプのことは避けて通れない。花井（2016）は少数派言語を母語に持つ親の子どもへの母語の選択・継承を促進さ

せる要因として、政治・歴史的背景の負の関連性の無さや政策・制度の改善などの政治・政策的要因を挙げている。負の歴史が彼の家族にも影響していたが、母親だけは日本語への思いを持ち続けていた。

4.4 日本語の価値

アメリカ社会は英語を話すことが求められる社会であり、その点ではハラグチさん家族にとって英語の使用には何ら不自由はない。そのような状況下で、日本語は家族にとってどのような価値を持っているのだろうか。「私にとっては・・・そうだね・・・日本の文化が分かることだと思う。ことばは文化の重要な部分だからね。通算で 10 年日本にいたので今の仕事にもとても役に立っている。これで日本語や日本文化が分からなかったら単に日系人というだけだからね。」という。ハラグチさんのクライアントは日系企業である。日本や日本語の背景があるからこそ仕事ができていると自信をもって語っている。「日本語を少しでも話すことができるというのはここではすごいパワフルなことだと思う。日本にいたからこそ、今ここで日本のクライアントをサポートすることができていると思う。」と述べ、十分に価値のあることだという。一方、家族にとってはどうだろうか。「子どもたちは皆アメリカで生まれ育ったけれど、アメリカでの日系人コミュニティの中で色々な人と知り合いになれるということかな。でもそこで日本語を学ぶということじゃないんだ。文化を継承していくという意味で。」と述べる。ここでは狭義の言語学習ということではなく日系人コミュニティの中で日本文化に触れ、自身のルーツを意識化することだろうか。日系人社会も世代が進むにつれ日系人以外の人たちとの婚姻が進んでいる。「私のいとこの内、4, 5 人は日系人以外と結婚している。だから段々ハーフからクォーターと薄まっていくんだけど・・・」と言いながら、「(だから) 私は日本の習慣も伝えていきたい。年越しそばとか栗きんとんとか。(hahaha...) 妻は伝えられないからね。」と笑う。

4.5 子どものアイデンティティと言語習得

ハラグチさんは長女には日本名 (Yuka) をつけた。他の 3 人はアメリカンネームだけである。その理由を尋ねると「男の子は Haraguchi の姓が残るけど女の子は姓が残らないからね。」という。4 人の子どものうち、Yuka が一番日本語に興味があり熱心だという。言語習得とアイデンティティは深く関わりとされる。川上 (2010) は「すべての子どもが親の期待通りに複数言語を習得していくわけではありません」とした上で「子どもにとって、自分の名前も、自分のことを考える要素になります」(p. 210) と述べている。Yuka は日本の歴史や文化を楽しく学ぶ高校生対象のクラブで部長をしている。ある日本語のコンペティションで Yuka のチームが選ばれて今年日本に行ってきたばかりという。「今、Yuka は日本語を学ぶことのベネフィットを感じているよ。日本で知り合った高校生とよくテキストメッセージを交換している。」それ以来、毎日、日本語でハラグチさんに話しかけたり質問したりするようになったという。「Dad, how do you say in Japanese I am busy for basketball this week? なんてね。」と笑う。「(Yuka にとっては) とても貴重な体験だった。」という。

兄弟の中で一人だけ日本名を持った Yuka は、名前も自分の個性と捉え、17 歳という多

感な年令ということとも相まって自身のルーツでもある日本・日本語を学ぶ動機になっていると考えることができるのではないか。「アイデンティティとは、自分の姿やあり方について自分が思うことと他者が思うことによって形成される意識」（川上 2010、p. 212）とすれば、それが継承言語・目標言語との距離に表れると考えられる。長男と Yuka は高校での外国語科目として日本語を選択したが、次男がスペイン語を選択した時は「disappointed」と語っていたのが印象的であった。

5. 事例（2）マイケル・カズオ・ウチダのケース

5.1 ファミリーヒストリー

ウチダさんはカリフォルニア生まれの日系3世である。家族は日系2世の妻と4人の子ども（長男・社会人、次男・大学院生、三男四男・高校生）がいる。子どもたちは4人ともアメリカ名と日本名を持ち、家庭内では日本名で呼び合っている。

5.2 家庭内での言語使用状況－日本語との出会い－

ウチダさんの家族は全員アメリカ生まれで、家庭の会話は英語である。ウチダさんは日本語を話さない。一方、妻は日系2世でもあり親との会話では日本語をよく使っていたという。結婚し家庭を持った後で日本語はどのように家庭に入ってきたのかを尋ねると「妻も仕事を持っていましたから、一番上の Jun は日本人のベビーシッターに面倒を見てもらいました。その人は英語は話さず日本語だけでしたね。Jun にとっては『おばあちゃん』という感じでした。」という。ウチダさんは「おばあちゃん」を懐かしむように日本語で言った。Jun は「おばあちゃん」に日本語で育てられた。「幼稚園に申し込みに行った時に Jun は非英語話者の方に登録されたんです。英語があまりうまくなかったんで。」と笑う。妻の両親や日本人のベビーシッターがいたことで家庭内には日本語環境があり、子どもたちは日本語を身近に感じ育っていった。

5.3 日本語の継承についての考え

5.3.1 ウチダさんの両親の思い

ウチダさんの両親も戦時中は収容所キャンプでの生活を余儀なくされた。「両親は戦争で仕事も奪われました。当時の人たちはアメリカへの忠誠を見せるために日本語を話さませんでした。どの世代でもそうでした。」という。「私の兄弟も日本人学校には行きませんでした。ですから日本語は話しません。」こうしてウチダさん家族は日本語を話さなくなった。一方、妻のカオリさんの母親は戦後一旦日本に帰国した後、再度カリフォルニアに戻ってきた。「義母は日英どちらも流暢でした。」という。ウチダさん家族は日本語と距離を置いたが、妻のカオリさん家族がいたことで日本語環境が残ることになった。

5.3.2 子どもたちへの日本語継承への思い

日本語を話さないウチダさんだが、子どもたちへは積極的に日本語に触れる環境を作ってきた。長男は幼稚園から毎週土曜日補習校へ通い、中学2年まで続けた。高校2年になるまで家庭教師もつけていたという。高校では日本語のクラスを履修、大学でも1年間日

本語を学んだ。次男にも長男とほぼ同様の日本語環境を与え、高校でも日本語を履修した。「妻が仕事で日本に行く時に何度か一緒に日本に行きましたね。」と機会を見て子どもたちを日本へ連れて行った。双子の三男と四男も同様の日本語環境を与えてきたが、彼らの通う高校には日本語クラスがないという。「残念ながら上の二人の子とは違う高校に行ったので日本語のクラスはなかったんです。それでスペイン語を取りました。(日本語クラスがあるべきでしょう。)」と笑いながらもいかにも残念そうに語った。高校の授業でやらないのであれば他の機会を見つけてでも日本語に触れさせたいという思いがあったのだろう。「双子の子をイマージョンプログラムに行かせたんです。日本での YMCA のプログラムに 2, 3 週間でしたが参加させました。」と外部のプログラムを見つけてきた。「プログラムには毎年送ってます。とても有益だと思います。」という。(どんな内容ですか)「YMCA キャンプなのでどちらかというと面白く楽しくという観点です。いろんな活動があつて。料理とかね。(hahaha)」

家族全員がカリフォルニアで生まれ育ち、英語を母語とし生活するのに何ら不自由のないウチダさん家族が、このように日本語の環境を子どもたちに与えてきたのはなぜだろうか。その思いはどこから来ているのだろうか。

5.4 日本語の価値

ウチダさんは日系アメリカ人といっても世代により日本語に対する思いは異なるという。「私は兄とは 18 歳離れています。私の世代、3 世ですが、前の世代よりもっと日本語や日本文化に価値を見出していると思います。ですから子どもたちも日本語学校に行かせたんです。」という。また、それは妻のカオリさんの思いでもあるという。「妻は日本語が流暢ですから、子どもたちに日本語を覚えてほしいという思いがありました。単に日本に行くことがあるとか以上に継承してほしいという思いがあったんだと思います。」と語る。(それに対してあなたはどうか。)」「私もそれがいいと思っていました。私も日本企業部で働いていましたから。仕事の面からもそれがいいと。」ウチダさんは日系企業担当部署で働いていることから、日本語を習得することによる道具的価値を見出している。子どもたちにとっての日本語の価値を尋ねると「上の二人にとっては、とても大事な価値があると思います。日本語は幼い時から慣れ親しんだことばで二人にとってはとても有益なものとなっています。」という。一方「双子の子にとっては上の子たちほど重要とは感じていないでしょう。そんなに長く日本語を勉強したわけではありませんから。交友関係でも日本人の友人は多くありません。」という。親は同じように日本語環境を与えたつもりでも子どもたちの習得は様ではない。「上の 2 人は日本人の友達が多くいます。いろいろな活動を通して、土曜の補習校などで過ごすこともありますね。スポーツに行きたいけど親から学校に行きなさいって言われて来ているとかね。(hahaha) そんな共通体験を持っていますから。」とウチダさんは情緒的な価値も見出している。

5.5 子どものアイデンティティと言語習得

ウチダさん家族は皆、日本名を持っている。「実は家の中ではみな日本名で呼んでいるんです。外ではアメリカ名なんですけど。どうしてかわかりませんが。(hahaha)」ハラグチ

さんの例でも見たが、日系人だからといって必ずしも日本名を持つわけではない。だが、ウチダさん家族は家庭の中では日本名で呼びあっている。子どもたちにとっての日本語の価値は上の2人と下の2人とでは異なるという。「下の子たちはそういった関係が（日本人との交友関係）があまりないので多分上の子たちほど日本語に対しての思いはないと思います。」（ということは下のお子さんたちの日系アメリカ人というアイデンティティは？）「そうですね・・上の子どもたちよりは少ないと思いますね。Less Asian という感じでしょうか。」と話す。ウチダさんは補習校を通じて日本人・日系人との情緒的な繋がりを深めた上の二人と、「Less Asian」とアイデンティファイされた下の二人とは日本語に対する距離感が異なるという。

6. 考察 一日本語教育関係者の役割と家族にとっての「ことばの継承」とは—

6.1 日本語教育関係者の役割

先の事例で見たように、海外で日本語を継承していくかどうかは全て個人の選択にかかっている。一方では「世代を超えた言語の継承は個人の努力のみによって行っていくことは非常に困難」（平岩 2016、p. 31）とも言われている。佐々木（2003b）は3代で消えないJHLのために「的確な情報に基づいた個人の意識的言語選択の実現が望ましい。（中略）そして言語継承の選択がなされた時には、遠隔教育等を含んだ多様な支援体制が用意されているべきである。」（p. 24）と述べている。ウチダ氏へのインタビューの最後に現地での日本語教育の位置付けを尋ねたところ、「（ある会合で）高校の日本語クラスが減っていることが報告され懸念が出ました。やはり正式なクラスがなければ在籍数は減ってきます。下の子たちも土曜の補習校に行かせてもいいんですが、他の活動もいろいろあって難しいのが現実です。」とした上で、「学校の履修科目になるかどうかがキーだと思います。」と高校に日本語クラスがあることが非常に重要ではないかと述べた。日本語教育関係者は「多様な支援体制」の一つとして、地域の公教育の中での外国語教育政策に今まで以上に積極的に関わることも必要であろう。（筆者の子どもたちが通った現地校では日本語のクラスはなかったが、韓国語のクラスがあった。）

6.2 ことばを継承するとは

改めて、ことばを継承するとはどういうことなのか。「Can do」で測られるものなのか。冒頭、ハラグチさんは「the Japanese language has been lost along the way.」と述べていた。これまでの彼の話しぶりや筆者の前では日本語をほとんど話すことのなかった状況から、文字通り「日本語の継承をしなかった人」と思っていた。しかし、インタビューが進むにつれ、確かに家庭でこそ日本語の使用はしていないが、10年の在日経験、母親の思いを受けて高校時代に学んだ日本語、限られた四技能ではあるが日本語が理解でき、子どもに日本名をつけその子が日本語の学びの入り口に立ったこと、そして日本の文化習慣を引き継ごうと日系社会に積極的に参加していること、などを聞くにつけ、インタビュー前に私が「継承しなかった」と認識していたことは、正しい理解なのかと疑問に思えてきたのである。

ウチダさんも同様である。彼自身は日本語を話すことはない。しかし4人の子どもたちを家庭内では日本名で呼び、補習校に長年通わせ、子どもたちを日本のYMCA キャンプに送り、楽しみながら日本語を覚えてくれたらいいと話す。上の子どもたちが通った高校には日本語のクラスがあったのに、下の子どもたちが通う高校には日本語のクラスがないとして「problem!」と笑う。インタビュー前は筆者にとっては彼も“日本語を継承しなかった人”だったのだが、はたしてそう判断していいのだろうか。

ハラグチさんやウチダさん親子が実践する日本語の継承は、JF 日本語教育スタンダードという課題遂行能力からみた言語能力やJLPTのN1を目指す教育とは異なるものである。現地での世代交代が進む中、継承語とは何を指すのか、どこまでを継承語と呼ぶのかについて筆者の中でも変容があった。本稿では「(アメリカの) 継承語学習者とは英語以外の特定の言語と家族或は祖先と繋がりを持ち、その特定の継承言語・文化を学習するかどうかを主体的に決める個人」とした。言語の習得といった場合はこれまでは言語運用能力の観点から言及される場合が多かったが、JHL(継承語としての日本語)やJFL(外国語としての日本語)といったカテゴリーに囚われることなく、自身のルーツであることばを現在進行形で学習し、主体的に継承を決めた個人であるハラグチさんやウチダさん親子を日本語を継承した家族と呼びたい。

7. おわりに

本稿では、海を渡った家族の父親の語りを通して“3代で消えていない”ことばの継承の様相を見てきた。二つの家族に共通しているのはアメリカという英語が求められる社会にあって、自身のルーツに誇りを持ち、長年に渡り子どもたちに様々な形で日本や日本語に触れさせてきたことである。そこには家族への思いと、個人の選択として親のことばを少しでも取り込み社会参加をしようとしている子どもの姿があった。佐々木(2003a)は海外の日系社会の特徴について「どの地域においても日系人以外の人々と日系人との結婚が進んでいる。(中略) 日系社会は中国系などに比べ新移民が少ない。新たな人の流入が限られているのが日系社会の特徴なのである。」(p. 37)と述べている。ハラグチ氏のいとこたちの何人かがまさしくそうであった。日系社会がますます多言語・多文化環境になっていく中で、次の世代はどのように日本語と関わっていくのだろうか。SNSを駆使して日本の学生とやりとりをし、動画サイトにJapan tripのビデオを載せるYukaや土曜日の補習校で日本人・日系人とのきずなを深めたJunたちの世代が新しい継承の仕方を見せてくれることを期待したい。

本稿ではアメリカの日系3世、4世の父親の語りを中心に考察を行った。海を渡った家族のことばの継承の様相は、それぞれの地域に置かれた社会的文脈により異なる。継承語を「言語資源」とみなすようになった北米と、「多民族社会ではあっても多文化主義を国の政策としているわけではない」(平岩2016、p. 25)南米や他の地域とでは、ことばへの関わり方は自ずと違ったものになるであろう。今後は、このような世代の進んだ家族と学習者が日本語教育にもたらす意味をより深く考察していくことを課題としたい。

注

- 1 海外日系人協会ホームページ <http://www.jadesas.or.jp/aboutnikkei/> 2017年11月5日
- 2 第2次世界大戦中、アメリカ西海岸に住む約12万人の日本人・日系人は内陸部の「収容所」で数年間生活することを強制された。

参考文献

- 井川斎 (1999) 「全米継承日本語教育会議開催」『海外日系人』45、pp. 84-86
- 稲垣みどり (2015) 「『継承日本語教育』における『パターンリズム』—在アイルランドの在留邦人の親に対するインタビュー事例から—」『早稲田日本語教育学』19、pp. 21-40
- 川上郁雄 (編) (2010) 『私も「移動する子ども」だった—異なる言語の間で育った子どもたちのライフストーリー—』くろしお出版
- 佐々木倫子 (2003a) 「加算的バイリンガル教育に向けて—継承日本語教育を中心に—」『桜美林シナジー』1、桜美林大学大学院国際学研究科、pp. 23-38
- 佐々木倫子 (2003b) 「3代で消えないJHLとは?—日系移民の日本語継承—」『母語・継承語・バイリンガル教育 (MHB) 研究』ブレ創刊、pp. 16-25
- ダグラス昌子・知念聖美 (2014) 「アメリカの継承日本語教育」『アメリカにおける日本語教育の過去・現在・未来』全米日本語教育学会、国際交流基金論文集、pp. 1-29
- 中島和子 (2010) 「母語・継承語はどうして重要か—カナダ・米国・日本の現状を踏まえて」『AJALT』33、国際日本語普及協会、pp. 14-17
- 中島和子 (2016) 『完全改訂版バイリンガル教育の方法—12歳までに親と教師ができること』アルク
- 花井理香 (2016) 『国際結婚家庭の言語選択要因—韓日・日韓国際結婚家庭の言語継承を中心として—』ナカニシヤ出版
- 平岩佐江子 (2016) 「日系社会における継承語教育の課題と展望—『継承語』概念の比較検討を通して」『JICA 横浜海外移住資料館研究紀要』11、pp. 17-36
- 村中雅子 (2010) 「日本人母親は国際児への日本語継承をどのように意味づけているか—フランス在住の日仏国際家族の場合—」『異文化間教育』31、pp. 61-75
- Hornberger, N. H., & Wang, S. C. (2008) Who are our heritage language learners? Identity and biliteracy in heritage language education in the United States. In D. M. Brinton, O. Kagan & S. Bauckus (eds.) *Heritage Language Education: A New Field Emerging* New York: Routledge. pp. 3-38
- Valdés, G. (2001) Heritage language students: Profiles and possibilities. In J. K. Peyton, D. A. Renard, & S. McGinnis, *Heritage language in America: Preserving a national resource*. pp. 37-77 Washington, D. C. & McHenry, IL: Center for applied Linguistics and Delta System.
- Yano, A. K. (2011) Issei Pioneers - Hawaii and the Mainland 1885-1924 - Part 18 <http://www.discovernikkei.org/en/journal/2011/5/2/3911/> 2017年12月2日

(さとう いつお 早稲田大学大学院日本語教育研究科・修士課程)